

東北大学の現状を憂う

河北新報 2019 年 6 月 3 日朝刊「持論時論」に、東北大学旧教員の投稿文が掲載されました。本人の了解のもと、その内容を紹介します。

東北大では、約 1 万 1 0 0 0 人の教職員が働いている。その数は年々増加しており、全教職員の約半数が准職員、非常勤講師、時間雇用職員の非正規雇用である。まさに非正規職員が東北大学の教育・研究・医療を支えていると言える。

2013 年に労働契約法が改正された。通算契約期間が 5 年を超える場合、非正規職員は無期契約への転換の申し込みが可能となった。毎年契約を更新する非正規雇用職員の安定雇用を目的としたものである。

東北大は 14 年に就業規則を改訂している。非正規職員の労働契約期間の上限を 5 年とした上、13 年にさかのぼって適用した。そのため 18 年 3 月、約 3 0 0 人の大量雇い止めが生じてしまった。事前に他の職を求めて辞職した方も少なくないので、やむを得ず東北大を離れた非正規職員数は、もっと多いものと思われる。今年の春も約 40 人が雇い止めになった。来年以降も 5 年目を迎えた非正規職員は同様の道をたどらざるを得ない。

多くの大学が無期契約に道を開いている中、東北大学の姿勢はマスコミでも大きく取り上げられた。しかし、東北大が方針を見直すという話は聞かない。

教員として 30 年間勤めた私は現在の東北大学の姿を深く憂える。大学は学問の府であり、教員と学生によって自由闊達な研究と、それに基づく教育が行われる場である。自治が認められ、社会的にも模範たるべき存在として運営されてきた。以前から事務室にはパートさんが、研究室には秘書さんや研究補助員が勤め、和気あいあいとした雰囲気の中で業務に当たっていた。

研究室の教授よりも長く勤めていた方も少なくなかった。5 年どころか 10 年以上、事務や研究の補助業務を担っていたのである。プロジェクトが終了したり、予算が不足したりした場合、これらの方々には他の研究室や部局が紹介されてきた。仕組みや研究の手順をよく知った方々が、いろいろな場面で活躍し、東北大を支え



てきたのである。

しかし、近年は前述の 5 年上限での雇い止めのみならず、大学内の他の職場にあっせんする配慮もなく、あっさりと機械的に東北大を追われてしまっている。大学の教育・研究・医療は、長期的に継続されるものである。非正規雇用の方を短期で簡単に雇い止めすることが、東北大にプラスに働くとは到底思えない。

先に大学は社会の模範であるべき、と記した。働く「者」を「物」のように扱う東北大学の姿は、日本全体で働き方や非正規雇用の待遇改善を議論している中で、どのように映るのであろうか。

東北大については、さまざまな研究成果が伝えられる一方、醜聞も少なくない。最近はこの大量雇い止めが学会でもよく話題になり、非常に恥ずかしい思いをしている。ここで非正規職員を大切にする方針にかじを切り、東北大学の名誉が回復されることを切に望む。